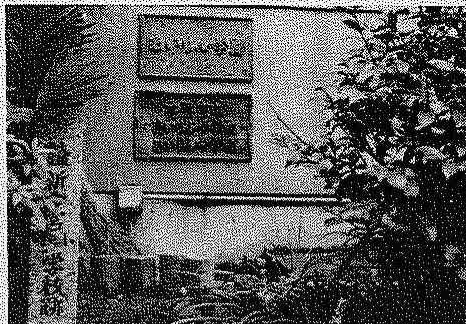


釜ヶ崎生活センターを求めて

——釜ヶ崎子ども実態調査報告——



新今宮小中学校跡地利用を考える会



▲新今宮小中学校の歴史の一端を顯す



▲花園公園で



▲花園北一丁目路上で



▲萩之茶屋二丁目路上で

釜ヶ崎子ども実



- ① 花園公園 (旧・テント村)
- ② 萩之茶屋北公園 ③ 萩之茶屋中公園
- ④ 西成市民館 ⑤ 旅路の里 ⑥ 子どもの里
- ⑦ ゲームセンター・タウン
- ⑧ 萩之茶屋南公園

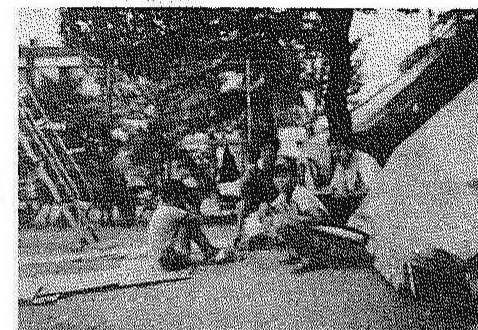
態調査関連地図



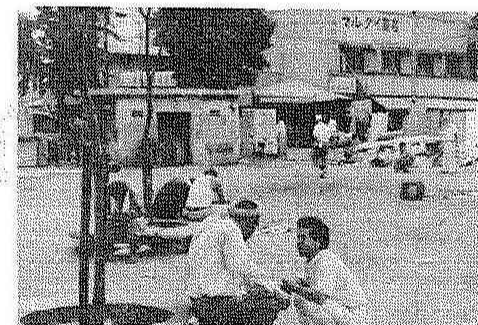
- ⑨ ゲームセンター・コンパ
- ⑩ ゲームセンター・ダウンタウン
- ⑪ ゲームセンター・カスガ
- ⑫ ゲームセンター・アサヒ
- ⑬ 今池子どもの家



▲天王寺公園で



▲萩之茶屋中公園 (四角公園) で



▲萩之茶屋南公園 (三角公園) で



釜ヶ崎子ども実態調査報告目次

釜ヶ崎子ども実態調査関連地図----- 表紙裏
差別をなくし、人権が尊ばれる

そんな教育が根づく街づくりを----- 4

『釜ヶ崎生活センター』実現にむけて----- 5

子どもと大人の生きる場で----- 7

①聞き取り対象者・調査方法・調査場所 ②聞き取りに答えてくれた子どもたち ③子どもたちはゲームセンターにいた ④公園に中学生がいない ⑤まとめの記述について

A. 生活

①どこにすんでいるか。住居の広さ ②朝起きる時間と夜寝る時間 ③何時ごろまで外で遊ぶか ④外で遊んでいる時間 ⑤家で遊ぶ時間は ⑥地区ごとに目立つ特徴が一職業分類 ⑦親とふれあう場としての食事は ⑧おこずかいの相場は一日百円～二百円 ⑨おこずかいの使い方 ⑩やはり多い転居 ⑪学校での“イジメ”

B. 地域・子ども・大人-----17

①釜ヶ崎の子どもたちは、釜ヶ崎が好きなのだろうか ②子どもと労働者との交流 ③子どもたちは大人をどうみているか ④失業中の労働者 ⑤酒を飲む労働者 ⑥鍵のかかった公園

C. あそびと子どもたち-----22

①今、どんな遊びをしているの ②主にどこであそぶの

D. 子どもたちの希望-----26

①どんなあそびがしたい ②どんな遊び場所がほしい ③将来、どんな仕事をしたい

『子ども調査補充用アンケート』-----32

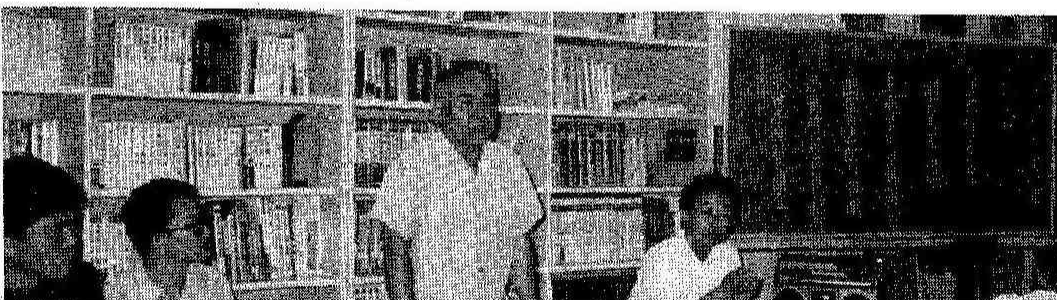
①話を聞いた人（調査対象者）の属性 ②大人（労働者）と子どもの関係 ③「公園の金網」と「新今宮小中学校跡地」についての労働者の意見

新今宮小中学校跡地の有効利用を-----40

実態調査からの提言／広場であそび集団を／食を軸に生活習慣を／青年に「若衆宿」を／差別に負けない子どもを／野宿の親子に援助を／生活・就学総合相談所を／社会・世代との交流の場を／技能訓練・軽作業所を／文化・娯楽センターを

●参考資料

子供達の叫びに新しい教育課題を窺て…生活センターを創る会-----46「釜ヶ崎」に新しい思想と文化を生み出す生活共同体の拠点建設を…西岡 智-----54



釜ヶ崎子ども実態調査協力者
学生 古屋淑子（埼玉）・河相雅子（広島）
藤本淳一・水谷 豊・川口桃子・清水明彦
林 浩康・入澤宏樹・富岡春美・松本伴一
（以上大阪）・松本勝男（名古屋）・中尾卓司
（池田）
高校生 小柳 選（京都）・松尾洋一（松南）
野口雄一郎（堺）・篠原明子（高槻）
教職員 鈴木繁夫（西宮）・久保良夫（藤井寺）
市川 肇（宇部）・三島愛子（島根）・岩野
清三郎（山口）・坂本和子（宇部）
学童・児童指導員 小谷野 泰（東京）・上河
能子・大松和夫（以上大阪）
団体職員 稲葉貞夫・渡辺信子（以上大阪）
町田 有（堺）
市教組 村瀬香織・山脇美江子・高野浩之・佐
藤高文・多賀 仁・宮脇弘次（以上今宮中）
竹之内善久・竹内敏晴・富麻英始（住吉川小）

差別をなくし、人権が尊ばれる そんな教育が根づく街づくりを

早や数年がたちましたが、横浜の寿町で、無抵抗の野宿労働者が、子ども達の手によって殺傷された心の痛む事件がありました。

私達はこの事件を教訓として、『釜ヶ崎問題』特に、新今宮小中学校の跡地を、地域の子どもや労働者に“解放”すべきだという立場で運動をすすめてきました。

その最中、人権教育が一定実践されつつあるこの大阪の地、四天王寺境内で、寿と同様に野宿労働者が、エアガンを手にする中・高生に襲撃されました。

行政から放置された労働者、子どもの心をむしばむ社会構造等々、これらにメスを入れるべく、猛暑の8月18日と19日の二日間、早朝より晩遅くまで“釜ヶ崎子ども実態調査”をおこないました。

調査参加の呼びかけに応えていただいた方は、大阪からだけでなく、名古屋・山口・島根な



岡林 治・高松栄枝（以上住吉小）・岡 繁樹・藤岡洋介（以上鶴見橋中）・石井頭一・花岡寿子（以上矢田南中）・柳井信一・小島敏郎（以上弘治小）・木村美樹子（荻田南小）・谷口順二（橋小）・和田幸子（梅南中）・白川洋二（市教組本部）
日雇労働者 斉藤善夫・上川長人・高見 忍・吉岡 基・藤田節男・中野 恵・松繁逸夫
他 高島美保（島根）・松野りえ（奈良）・中
下由佳（西宮）・北本 宏・佐川みどり・松
繁弓子（以上大阪）・橋本正人・大谷隆夫
（以上どばとの会）・島 和博・牛草英晴（以
上釜ヶ崎資料センター）・金井愛明（釜ヶ崎
差別と闘う連絡会）・薄田 昇（釜ヶ崎キリ
スト教協友会・旅路の里）・小柳伸顕（釜ヶ
崎生活センターを創る会）・黒田伊彦（矢田
解放塾）・奥田雅章（釜日労）・中島共子
（子どもの里）・本間啓一郎（釜ヶ崎夜間学校）



ど遠隔の地から、学生・教育労働者・学者・地元労働者等々、多岐にわたる人々でした。

特定の学校で実施する調査のように、全員対象というわけにはいきませんでした。が、全地域にわたって調査をおこないました。

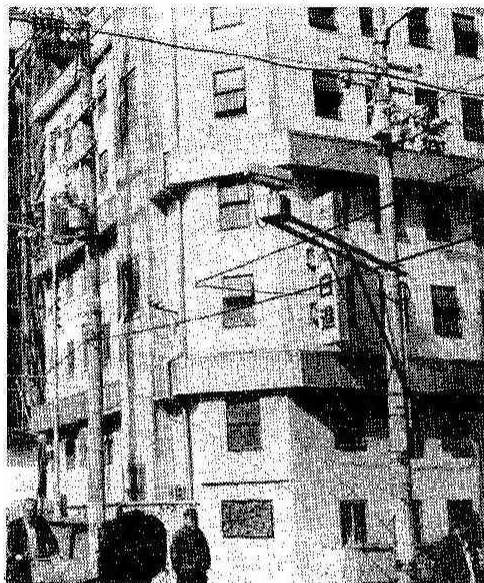
調査結果の分析をテコとして、行政への働きかけを強め、地域の子どもの大人が、ともに学び、ともに生活する、そんな『生活センター』が一日も早く実現するため、ともにがんばりましょう。

あわせて、私達の身辺から、差別をなくし、人権が何よりも尊ばれる、そんな教育が根づく街をつくりましょう。

新今宮小中学校跡地利用を考える会
代表 岡 林 治
（大阪市教職員組合南大阪支部長）

『釜ヶ崎生活センター』実現にむけて

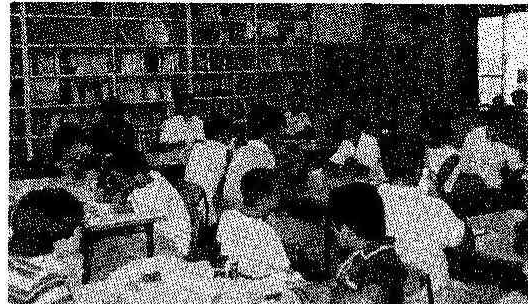
1986年8月18・19日の両日、『釜ヶ崎子ども実態調査』がおこなわれた。この調査を計画し、実施したのは『新今宮小中学校の跡地利用を考える会』である。



▲ドヤ(一つの窓が一室)と警察の監視カメラ

『会』の経過を詳しくいうならば、この調査が『跡地利用を考える会』の活動の最初のものというわけでも、これまでの要求が根拠のあやふやなものであったというわけでもない。

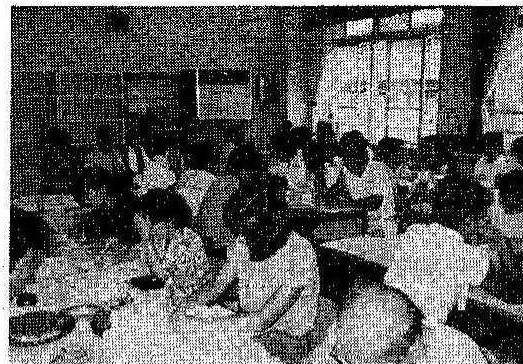
『跡地利用を考える会』はすでに、地区の子どもたちの学童保育をおこなっている『子どもの里』の指導員中島さんや、かつて『新今宮小中学校』にケースワーカーとして関わっておられた小柳さん、あるいは地元の教師集団のこれまでの体験の集積や、釜ヶ崎の労働者のかかえる諸問題に取り組んできた諸団体の経験を踏まえて、「跡地利用」の大枠での要求をまとめ、釜ヶ崎内外での1万7千人を超える支持署名と共に、大阪市に対して提出(1985年10月7日)している。



会の名称が示しているごとく、今回の調査は、たんなる学術的な関心からなされたものではなく、1961年8月1日の、いわゆる釜ヶ崎第一次暴動をきっかけに、広く注目を集めた釜ヶ崎のかかえる諸問題への一つの対応策として、プレハブの仮校舎で発足した釜ヶ崎の未就・不就学児童のための学校『あいりん学園』が、地元住民・労働者・教師などの運動によって、運動場のある学校『新今宮小中学校』へと発展した後、1984年4月、最後の卒業生を送り出して廃校となったことを受けて、その跡地の有効利用を、より釜ヶ崎の現実に即した『生活センター』創りをおこなうための資料を得、より強く行政に実現をせまっていくための根拠を補強することを目的としたものである。

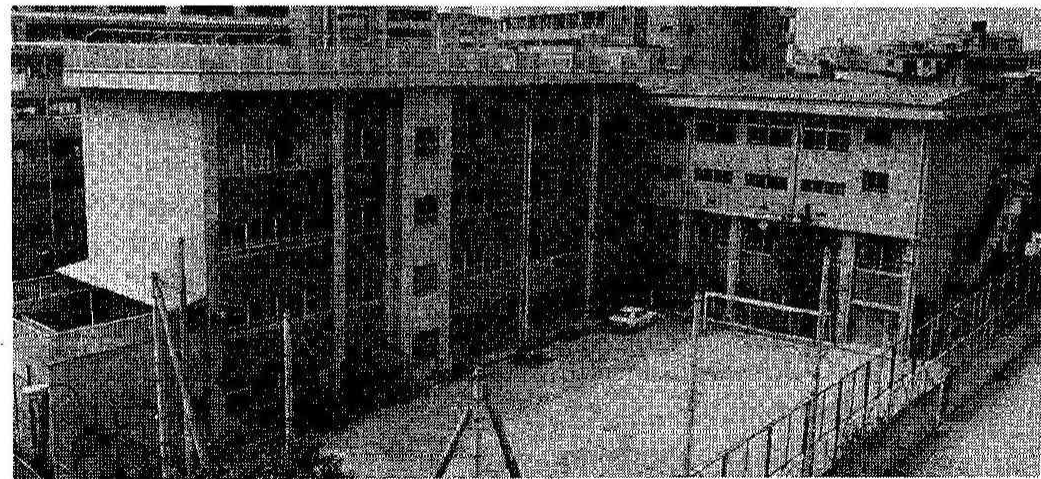


▲今も続く公園の封鎖



▲旧新今宮小中学校図書室で実態調査準備

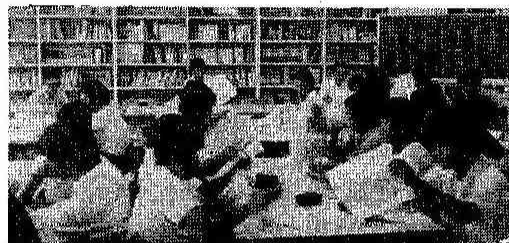
行政が「研究を続けていきたい」と回答したのであるなら、私達は自らの手で要求の裏付けとなる資料を作成し、行政と共にそれを検討・研究することによって、要求の早期実現をせまっていきたいと考え、『釜ヶ崎子ども実態調査』が実施されたのである。



▲旧新今宮小中学校全景

幸いにして、今回の調査は、『跡地利用を考える会』のかかげている『釜ヶ崎生活センター』構想が、署名活動を通じて、多くの人々の支持を受けていたこともあり、調査協力者は他府県からの11名の参加を含め、55名という多人数にのぼり、聞き取りをした子ども225人、日雇労働者ら143人という当初の予想を上回る成果をあげることができた。

大阪市は、私達の要求(1)子どものために— ①学童保育・子ども会の活動の場 ②短期間の子どもの保護・宿泊施設・教育相談室 ③近隣の学校の教職員・子どもの活動の場とすること (2)地域住民・労働者のために— (1)の要求実現と関連して、その延長線上に必要な社会教育の場とすること)に対して、「今後とも、研究を続けていきたい」という、あまり積極的とは思えない文書回答を出してきている。



ここにその成果を小冊子としてまとめ、刊行するのは、多くの人々の運動に対する更なる理解と支援を求めると共に、大阪府・市に提出し、交渉を深め、『釜ヶ崎生活センター』の実現を計るという、『子ども実態調査』の目的にそつてのことである。御一読の上、ご協力をお願い申し上げます。

子どもと大人の生きる場で

1. 聞き取り対象者・調査方法・調査場所

『釜ヶ崎生活センター』は、地域の大人と子どもが共に生きられる場として構想されている。従って、今回の聞き取り対象者は、『釜ヶ崎生活センター』を利用する可能性のある釜ヶ崎及びその周辺の総ての子どもと大人と設定されたが、勿論、全数調査できるはずはなく、場所を決めて、その場にいるものから無作為に聞き取りをおこなうこととした。子どもについて言えば、釜ヶ崎地区及び周辺の公園（三角公園・四角公園・萩之茶屋北公園・花園公園・天王寺公園）や路上、ゲームセンター（地区内三軒・新世界二軒）で遊んでいる子どもから、アンケート用紙にもとづいて聞き取り調査をおこなうこととした。

大人についていえば、家族関係以外で大人と子どもとがふれあう機会の多い、公園・路上・ゲームセンターでの、アンケート用紙にもとづいた聞き取り調査をおこなうこととした。

なお、大人についての聞き取り方法や結果については、第二部で詳しくふれる。

2. 聞き取りに 答えてくれた子どもたち

回答票のうち、不完全なもの、重複していたものを除いた結果、225票がまとの対象票となった。年令・男女別内訳は表Ⅰの通りであるが、青年とあるのは、20才未満の社会人（地区出身者がほとんど）である。

今回の調査が、将来『生活センター』ができたときに利用すると予想される子どもを対象として、遊び場を中心としてなされたものであり、

学校別調査のような明確なワクをもとと持っていないので、調査対象の母集団を推定することができず、この数字と母集団との比較をおこなって本調査の基本的な位置付けをおこなうことはできない。

しかし、本調査の目的から言えば、18日の午後2時から10時までと翌朝7時から12時までの調査で、これだけの子どもが『生活センター』を利用する可能性があることを把握しえたということだけで充分であると考えられる。

回答者の所属する学校は次の通り。

保育・幼稚園——わかき保育園・山王保育園・花園幼稚園（以上西成区）、金塚幼稚園（阿倍野区）、勝山愛和幼稚園（生野区）

小学校——今宮・萩之茶屋・弘治・天下茶屋・千本・橘・松之宮（以上西成区）、恵美・栄・日東（以上浪速区）、金塚・丸山（以上阿倍野区）、長吉六反（平野区）、愛日（東区）、佃（東淀川区）、用和（八尾市）、東羽衣（高石市）、松山（愛媛）

中学校——今宮・梅南・成南・天下茶屋・鶴見橋（以上西成区）、日本橋・木津（淀川区）、松虫（阿倍野区）、大正西（大正区）、船場（東区）、山直（岸和田）

高校——西成（西成区）、阿倍野（阿倍野区）、阪南（住吉区）、成城（城東区）、鳥飼（摂津

表Ⅰ	男	女	計
幼児	13	2	15
小低学年	34	14	48
小高学年	60	20	80
中学生	44	13	57
高校生	11	0	11
青年	14	0	14
合計	176	49	225

市）、英国四天王寺（英国）

回答者の所属学校の多様さは、新世界・天王寺公園においては一定、予想されていたが、地区内での多様さは予想外のものではあった。はしなくも、私達の要求の一つ「近隣の学校の教職員・子どもの活動の場とすること」の必要性を、もともと考えられていたこととは別の側面から立証するものとなっている。

参考までに、回答者中の萩小在校生と萩小在校生全体との対比（図Ⅰ）、今中のそれ（図Ⅱ）を示しておく。

3. 子どもたちは ゲームセンターにいた

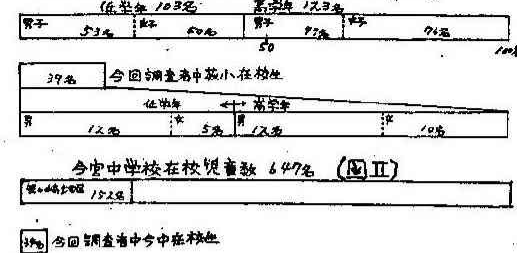
回答者の調査場所別分類は（図Ⅲ）のようになっている。

一番多いのがゲームセンターでの聞き取りで103名（45・8%）、次に公園、路上の87名（38・7%）、学童保育現場三ヶ所での35名（15・5%）となっている。

調査場所分類を回答者の居住地区別にグループ分けしたのが、全体の下に示した01・02などの帯グラフである。

01は萩之茶屋地区に住む子どもたちのグループであるが、全体が68名、路上・公園が3

萩之茶屋小学校 在校生数 226名（図Ⅰ）



今宮中学校 在校生数 647名（図Ⅱ）



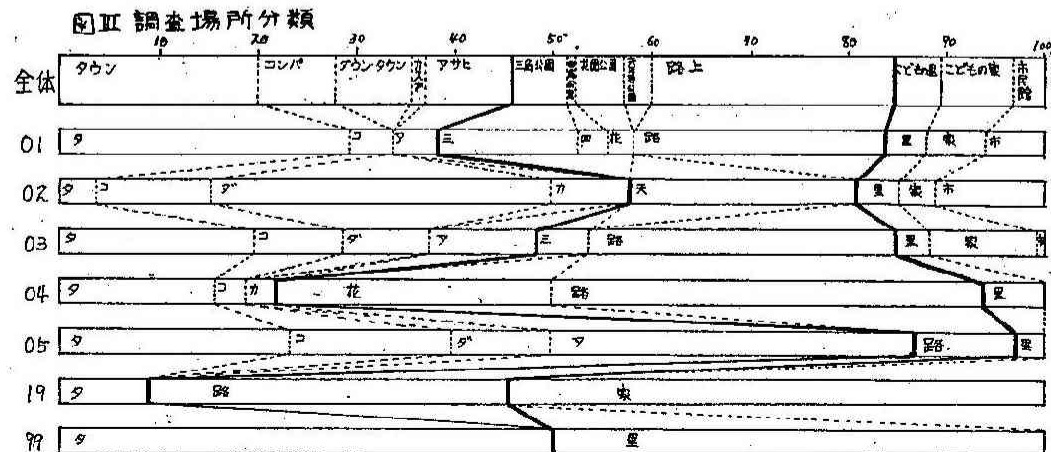
1名、ゲームセンター26名、学童現場が11名となっている。

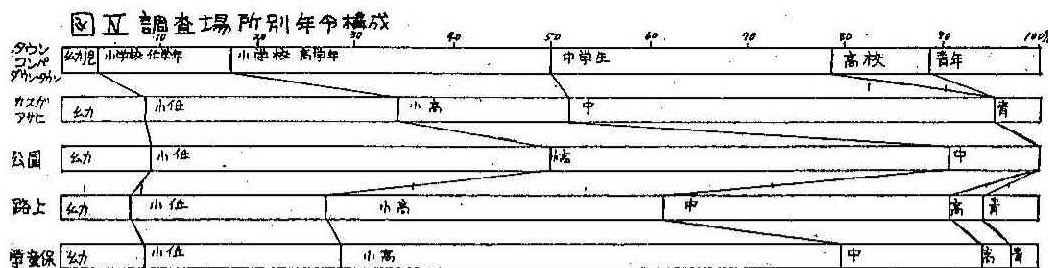
02は山王・太子に住む子どもたちで、全体が26名、ゲームセンター15名、路上・公園6名、学童現場5名となっている。

03は釜ヶ崎周辺部で、天下茶屋・鶴見橋・恵美須町などに住む子どもたちで56名、ゲームセンターが27名、公園・路上20名、学童現場9名となっている。

04は花園地区を中心として居住している子どもたちで、全体で32名、公園・路上が23名、ゲームセンター7名、学童現場2名となっている。

05は、釜ヶ崎のより遠い周縁部の子どもたちで、30名。ゲームセンターがほとんどを占めるのが特徴で26名、公園・路上3名、学童現場1名となっている。





19は、01ないし02・04に分類されるべき子どもたちであるが（今中・今小在校生）、票によって居住地を確定できなかったグループである。

99はまったく分類の手がかりのなかったもの（2名）である。

02においてゲームセンターに占める割合が高いのは、山王にある公園・学童現場を調査場所に設定しなかったことが原因と考えられる。

4. 公園に中学生がいない

回答者を調査場所別に年齢構成がわかるように示したものが図Ⅳである。

ゲームセンターに行く年齢層は、小学校高学年以上が多数を占めているが、公園においては中学生以上がほとんど見られないこと、路上と学童保育現場においては各層が認められること、それらのことが一見して読みとれる。

中学生の姿が公園においてほとんど見かけられなかったことについては、その理由が考えられなければならないが、特に問題として考えられなければならないのは、学童現場には各層が



認められるが、聞き取り場所別での構成で判るように、子どもたちの利用数が少ないことである。それは、一つには施設の大きさに規定されていると考えられる。

5. まとめの記述について

以下、アンケート項目に従っての「まとめ」に入っていくわけであるが、調査の目的から、早期にまとめ、発表することが優先され、各項目ごとに分担者を決め、それを持ち寄って全員で検討・確認するという方法をとらざるを得なかったし、「まとめ」の方法・記述スタイルを整えることもなしえなかった。

冒頭にも述べたように、本調査は学術的意味合いでなされたものではなく、釜ヶ崎における子どもの現状と大人とのふれあいを浮きぼりにし、『生活センター』創りに資する目的でなされたものであることから言えば、「まとめ」の形式のバラつきが、結果として多様な視点から現状を浮きぼりにすることを保証したものとなっており、多くの人々の理解を促すのに力となると考えられ、欠点ではなく長所になっていると思われる。

分担は次の通り。前書・回答者分類—松繁、生活1～5まで黒田、生活6～11まで竹之内、松繁、地域—小柳、あそび—中島。

なお、第二部大人アンケートは一括して牛草が担当した。

A. 生活

萩の茶屋地区にすむ子どもを「釜ヶ崎の子どもたち」とし「山王・太子」「花園」「西成・浪速」の周辺地域を一つにして、比較することにした。また設問に答えた子どものみで割合を出し、N. A (No Answer) 群をはずした。

①どこにすんでいるか。住居の広さ

釜ヶ崎の子ども達は4.5畳以下一間のせまい住居（アパート）に住んでいるのが25%で、周辺地域12%の2倍に達する。

二間が43%と多く、周辺地域の三間54%が一番多いのと比較して一間せまいことがわかる。

これは釜ヶ崎が日雇労働者の単身者の街でドヤ街が増えるにしたがって、家族持ちの住める部屋がなくなって来ていることも原因している。また家族持ちも狭い「日払いアパート」に暮し

地 域		釜ヶ崎		周辺地域	
割 合		人数	%	人数	%
一 間	4.5畳以下	14人	25%	10人	12%
	4.5～6畳	6	11	12	15
2 間		24	43	15	18
3 間		12	21	44	54
計		56人	100%	81人	100%
N. A		12人		114人	

ている釜ヶ崎の特色がよく現われている。狭いアパートはまた戸外での夜遊びの原因になることも考えられる。

地 域		釜ヶ崎		周辺地域	
割 合		人数	%	人数	%
朝 起 きの 時 間	6 時 前	4人	6%	7人	8%
	6～7時	15	22	10	11
	7～8時	20	30	22	25
	8時～	28	42	50	56
	計	67人	100%	89人	100%
N. A		1人		25人	

②朝起きる時間と夜寝る時間

釜ヶ崎の子の58%は午前8時までで起き、周辺地域の子は8時以降が56%で、寝る時間は10時～12時に両地域共に集中している。

聞きとりの中から朝早い家庭の職業をとり出すと次表ようになる。子どもは親の生活に合せているといえる。

釜ヶ崎の父子家庭5軒、母子家庭1軒のねる時間は午後11時～12時と比較的遅い。

地 域		釜ヶ崎		周辺地域	
割 合		人数	%	人数	%
夜 寝 る 時 間	PM8～9	4人	8%	6人	5%
	9～10	18	27	31	29
	10～12	30	45	52	49
	12～	14	21	18	17
	計	66人	100%	107人	100%
N. A		2人		114人	

5 時 起 床	バラシ (コンクリートの 仮枠はずし)	7 時	大 鉄 筋 工
6 時 運 送 業			工 場 クリーニング
			豆腐屋

2・3の事例を示すと、

①母死亡、父子家庭で6畳一間のアパートで、12時ごろに寝る ②父、母共酒屋づとめで市営アパートにすむが12時に寝る ③母子家庭で母は飲み屋で働き午前2時ごろ帰宅する。子どもも朝9時ごろに起き、母親の時間帯に合せ

ている。

3何時ごろまで外で遊ぶか

「みおつくしの鐘」は10時に鳴る。家へ帰ろうという社会常識の門限の最高時間を示しているという。

その10時以降も戸外で遊んでいるのは、釜ヶ崎14%で周辺地域の7%の倍になっている。

最高の数値は釜ヶ崎6～7時33%、周辺地域5～6時で39%となっており釜ヶ崎は夕食時間が1時間周辺地域より遅い。

夜の12時以後戸外で遊んでいるのは、20才までの中卒の青年達であった。家は狭くてむし暑いという状況も反映しているが、たむろして話し合う若衆宿的な施設の必要性が痛感させられる。

4外で遊んでいる時間

最大値は釜ヶ崎の子どもは8～10時間の23%周辺地域の5～6時間20%に比べ、約2時間戸外で遊ぶ時間が多い。

ではどこで遊ぶのか。公園は金網が張られていて入れないので、ゲームセンターへいくケースが多い。朝8時から入りびたっている子もいる。

学校のある時の外で遊ぶ時間

5時間以上戸外で遊ぶ子どもは釜ヶ崎では20%、周辺地域では12%で、釜ヶ崎は比較的多い。

外で全く遊ばない3人の子どもの中、2人は子どもの家で遊んでおり、1人は塾通いであった。

5家で遊ぶ時間は

家で遊ぶ時間は釜ヶ崎の子どもの76%は3時間以内、周辺地域は77%が4時間以内で、約1時間周辺地域の方が多い。

時間	釜ヶ崎		周辺地域	
	人数	%	人数	%
PM 5時まで	3人	5%	8人	8
5～6	10	16	41	39
6～7	20	33	27	26
7～9	12	19	16	15
9～10	7	12	5	5
10～12	4	6	5	5
12～	5	8	2	2
計	61人	99%	105人	100%
N. A	7人		10人	

時間	釜ヶ崎		周辺地域	
	人数	%	人数	%
0時間	3人	6%	1人	1%
1～2	3	6	10	11
2～3	5	10	9	10
3～4	2	4	4	5
4～5	2	4	15	16
5～6	7	14	18	20
6～8	8	16	12	13
8～10	12	23	14	16
10～	9	17	7	8
計	51人	100%	90人	100%
N. A	17人		74人	

時間	釜ヶ崎		周辺地域	
	人数	%	人数	%
0時間	4	8	4	5
0～2時間	7	14	13	17
2～3	13	26	20	26
3～4	8	16	19	24
4～5	8	16	12	16
5～6	7	14	5	6
6時間以上	3	6	5	6
合計	50人	100%	78	100%
N. A	18人		36	

学校がある時は、釜ヶ崎の子の69%が2時間以内、周辺地域は84%が3時間以内で、やはり1時間多い。釜ヶ崎の子は家で遊ばない子が31%もいる。これは遊ばないのでなく、遊

時間	釜ヶ崎		周辺地域	
	人数	%	人数	%
0時間	7人	17%	10人	13%
0～1	1	3	8	10
1～2	11	28	14	18
2～3	11	28	13	17
3～4	7	18	15	19
4～5	1	3	8	10
5～6	1	3	3	4
6時間以上	0	1	7	9
計	39人	100%	78人	100%
N. A	29人		37人	

6地区ごとに目立つ特徴が——職業分類

子どもの回答数は225人であるが、ここでは兄弟・姉妹などの重複した数は抜いているので199人という調査数になった。

まず共働きであるが、199人のうち、そう答えた子どもが86人あり、全体の43.2%になる。

父のみが働いているとの回答は49人、母のみが働いているとの回答は34人である。

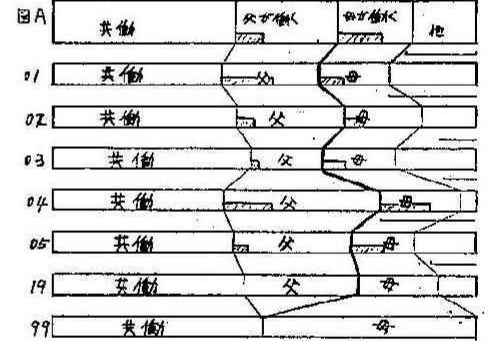
つまり、どちらか一方のみが働いているとの回答数は83人で、これは41.7%である。

なお、この調査では、199人のうち、父子家庭が13、母子家庭が20あり、全体の16.5%を占めている。

地区別での比率を示したものが図Aである。帯グラフ中の「父が働く」にある斜線部分は父子家庭を示し、「母が働く」にある斜線部分は母子家庭を示す。

べないのである。約3割の子が狭い部屋で友達と遊ぶことは出来ない。部屋数1間のみ36%という数値とほぼ合致している。

時間	釜ヶ崎		周辺地域	
	人数	%	人数	%
0時間	10人	31%	5人	6%
0～1	1	3	9	11
1～2	11	35	27	34
2～3	2	6	26	33
3～4	8	25	8	10
4～5	0		1	1.5
5～6	0		1	1.5
6時間以上	0		2	3
計	32人	100%	79人	100%
N. A	36人		35人	



現在の日本の社会では共働きが当然視される傾向が強く、各地区にはほぼ同じ比率、しかも最も大きな割合を占めて共働きが存在することはうなづける。共働きに次いで、各地区とも「父のみが働く」が大きな割合を占めている。

「共働き」と父子家庭を除いた「父のみが働く」との回答は、現在の日本の社会では一応標準家庭といわれるものであるが、気にかかるのは、母子家庭ではないのに「母のみが働く」との回答が、各地区に相似た比率で存在する点である。回答票に、「父が入院中」あるいは「ケ

がのため、などの書き込みがあるものが2、3あったが、もっと違う事情によるものもあるように思える。

地区別の特徴でいえば、01（萩の茶屋地区）及び04（花園地区）において父子家庭が目立つ点である。これは、両地区に母子家庭もあるにしても、労働者の街・釜ヶ崎らしい特色といえはいえるかも知れない。しかし、標準家庭を生活スタイルの基礎に置き、母子・父子家庭に対する十分な社会対応をおこなっていない日本においては、そこに生まれ、育つ子どもの上に各種の困難がおおいかぶさっているだろうことを思うのは容易である。

具体的な職業で、各地区において数の多いものを挙げると次のようになる。

01（萩の茶屋地区）

父親の職業 — 大工・鉄筋工などの職人11人、会社員5人、酒屋4人、日雇3人。

母親の職業 — 店の手伝い12人、酒屋5人、ドヤ・アパート管理人3人。

02（山王・太子地区）

父親の職業 — 大工など職人5人、会社員4人、日雇2人。

母親の職業 — 喫茶店3人、内職3人、パート2人。

03（天下茶屋・鶴見橋・恵美須など）

父親の職業 — 大工・鉄筋工など職人8人、酒屋・うどん屋など6人、会社員6人。

母親の職業 — パート5人、店の手伝い5人、内職3人。

04（花園地区）

父親の職業 — 手配師4人、くつや3人、日雇2人。

母親の職業 — 内職3人、スナック3人、食堂2人。

05（釜ヶ崎より遠い地区）

父親の職業 — 会社員6人、運送屋2人、工場2人、食べ物屋2人。

母親の職業 — 喫茶・食堂5人、会社員2人。

19（今小・今中在校生で地区別不明）

父親の職業 — 会社員2人、焼肉屋・カバン屋、教師。

母親の職業 — 焼肉屋・散髪屋・パート・内職。

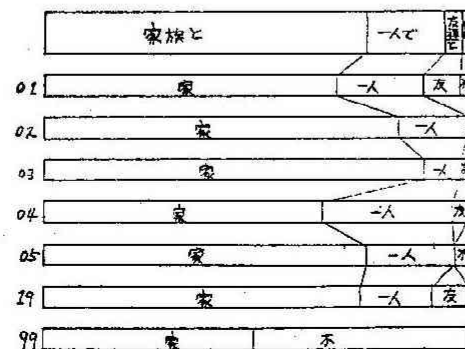
7 親とふれあう場としての食事は……

食事時は子どもにとって、一般的には、あれやこれやの話を親に聞いてもらうに都合のいい場であると思う。しかしながら、本調査に答えてくれた子どもたちにとって、家族の“団らん”はあるのであろうか。ここにも興味深い結果が数値として現われている。

一つには、「一人で食べる」と答えた子が、239（一人で複数の回答をした子どもがいる）の回答のうち43、友達と外食と答えたのが9あった。家族と食べていない、いや、食べられない子どもが52を数え、割合としても22%になる。

地区別に見れば、図Aの“働き手別分類”と同様に、01・04に特徴があることがわかる。

「一人で食事」と答えた43、外食との答9のうち、萩の茶屋地区はそれぞれ15、6と集中



している。

また、「家族と食事する」との回答の中にも、アンケート用紙への書き込みを見ると、「弟と一緒に」とか、「姉がつくる」などが各グループに共通してあり、親との語らいという面であれば、全体としてももう少し比率が下がることになる。

食事の回数について言えば、01と「遠征組」の05について食事回数の少ないのが目立ち、特に01には、一回だけと答えているものが5人もいる。

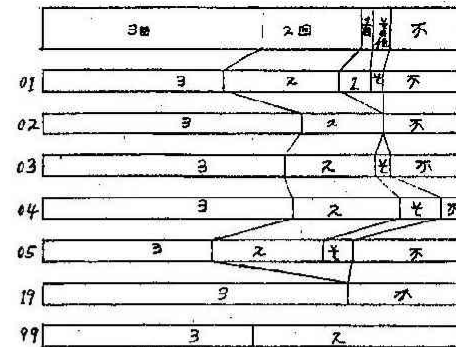
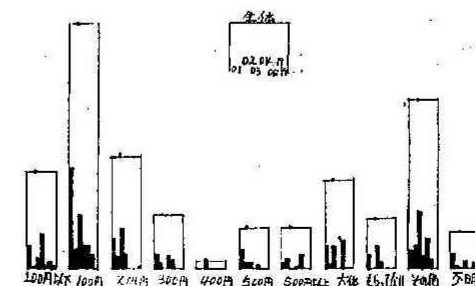
育ち盛りの子どもたちを対象とした調査であることを考えるならば、この結果は、子どもたちの健康維持の面でも考えなければならないことを示していると思われる。

8 おこづかいの相場は一日百円～二百円

おこづかいの金額そのものは、一日百円～二百円の回答が総数の40%弱を占め、大体そのあたりが平均的であることを示している。

おこづかいのもらい方は、一日単位でもらうものが多いが、週決め、月決めでというように単位毎のものもある。中には時々千円、通常五百円というものもあった。

しかし、「おこづかい」といっても、その子どもの生活状況によって持つ意味が異なっており、単純に金額の多少によって“ゆたかさ”を



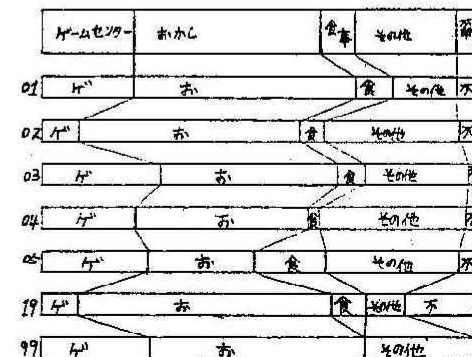
比較することはできない。

たとえば、ある子どもは、毎日百円をもらって、もっぱらゲームセンター、おかしなど遊びの中で消費する。しかし、別の子どもは、毎日五百円以上もらうが、そのお金で食事をした上で遊ぶことに使わなければならない。とすれば、両者の間には、百円と五百円という金額上の“ゆたかさ”とは別種の“ゆたかさ”の面において逆転現象があると言えるのではないか。

本調査において、「おこづかい」の額の単純比較によって得られるところは、さほど大きくないように思われる。

9 こづかいの使い方

おこづかいの使途は、下図のようにまとめられる。ゲームセンターでの聞き取りが多い割には、こづかいの使途として、ゲームセンター代の占める割合が少ないように思われるが、一人



で二つ、三つと答えた子どもが半数近くいたせいでと思われる。

この項での特徴は、“その他”のところでは貯金と答えた子どもが01には少なかったことだ。(もっぱら貯金だけと答えている子もいたが、大方は、おかしと貯金、ゲームセンターと貯金というように答えており、使った残りを貯金しているということのようだ。)

貯金と答えた子どもは27人いるが、そのうち萩之茶屋地区の子どもは4人にすぎない。

ちなみに、貯金の目的は、卓球の道具を買うためが2人、ファミコンカセット3人、つりに行く1人であった。

その他で貯金以外の目立つものは、小学校高学年の文房具、本であった。中学生に、喫茶店代、プロマイドがあった。

10 やはり多い転居

都市部においては、親の勤めとの関係や、子どもが生まれて広い住まいを求めてという理由で、転居が多いとされているが、本調査においてもその傾向があらわれているように思う。自営業者にしても、店舗と住居の分離から、転居経験者がいる。釜ヶ崎についていえば、店は釜ヶ崎の中にあるが、住まいは鶴見橋などに新しく建

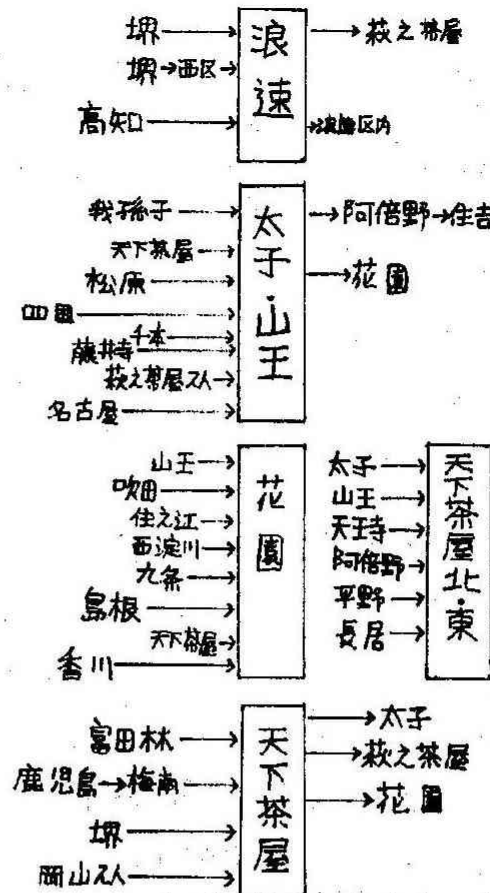
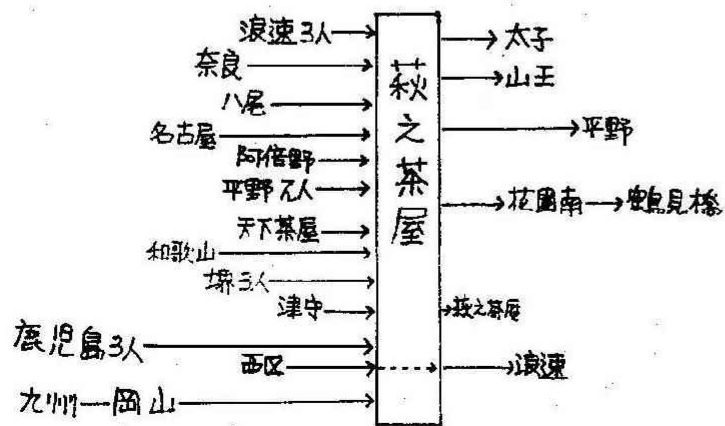
てられたマンションなどに移している例が増えてきている。釜ヶ崎は商売するには、多勢の労働者がいて有利だが、生活するには避けたいところとする考えがあることを示している。

そういった考えがある一方で、萩之茶屋・太子・山王などへの転居もかなりある。(もっとも、本調査が、釜ヶ崎及びその周辺で遊んでいる子どもを対象としたものであるから、それは当然の結果と言えるし、遠くへ転居したものについては、もともと把握しえないのであるが。

右頁や下に示した表は、四角く囲んだ地名への転入、そこからの転出を、子どもたちの聞き取りから判った範囲でまとめたものであるが、萩之茶屋地区への“家族連れ”の転居もかなり目立つ。職業との関連でいえば、大工・鉄筋工などの職人が多いが、母子家庭あるいは父親が働けないか、父親の職業の記入のないものも多く、それぞれに事情があることをうかがわせている。

花園・太子・山王についても、転入者には日雇・職人層が多く、中に、サラリーマン、あるいはあらたに商売に移ってきたものが散見される。転出について言えば、転入後、生活が落ち着いた時点で広い住居を求めて周辺部に移っていく傾向があるように思う。

		ハイ	イエ
生まれたときから住んでる?	01	36	27
	02	12	11
	03	28	27
	04	12	19
	05	8	15
	19	9	1
	99	1	1
	計	106人	101人



11 学校でのイジメ、

学校での“イジメ”は、イジメられた子の自殺という結果から問題が表面化することが多く、その構造の研究、現場の教師による解消に向けての日常的な努力も積み重ねられているところである。本調査においても、「学校でイジメられたことがあるか」の質問を設け、子どもたち自身から聞いてみた。

しかし、「ある・ない」を答えてもらうだけの単純なもので、“イジメ”の態様について踏み込んだ質問を設けていないことから、不十分なものとなっており、読み取れることも少ない

が、アンケート用紙への書き込みを頼りに、読み取れる範囲でまとめてみたい。

下の図は聞き取りの結果をあらわしたものであるが、イジメられたことがあると答えた子どもは萩之茶屋地区、山王・太子地区に多いことを示している。

アンケート用紙への書き込みを見ると、“イジメ”の態様は、男・女・中学・小学すべてにわたって、「けられた、どつかれた」という暴力的なものが多い。しかも、その暴力が「相互的な暴力=ケンカ」ではないことを、「上級生から」という補足から読みとることができる。“上位者”から“下位者”への一方的暴力が横行していると言えるだろう。

また、女の子に、「男の子から文句いわれる、つねられる、たたかれる」というものが散見される。

口による“イジメ”では、「こじきとかいわれる、へんなアダ名をつけられた、コソコソ陰口をいわれる」などがあつた。

気になるのは、イジメられた体験を聞いているのに、「イジメたことある、どついた」などと、イジメたことがあるのを積極的に答えている子どもが、各地区に存在していることである。子どもたちの“イジメ”に対する認識が、まだまだ不十分なものであることを示していると思われる。

全体	ある	ない	不明
01	ある	ない	不明
02	ある	ない	不明
03	ある	ない	不明
04	ある	ない	不明
05	ある	ない	不明
19	ある	ない	不明
99	ある	ない	不明